パーリ仏教文献における Samasīsin について
――自殺と阿羅漢果――

内　田　み　ど　り

1. はじめに

Samasīsin と言う語は，首等［者］，齊首と訳されるが，4ニカーヤにはなく[1]主に，パーリアビダンマ，註釈文献に現れる用語であり，「煩悩の滅と同時にその命を終えるもの」という意味である．この語は，次の二点で注目すべきである．第一に，Samasīsin は，煩悩を滅した解脱の時点と関連し，比丘（修行僧）の阿羅漢果の獲得に関わる．第二に，この語は仏教における自殺の問題において意味を持つ．この語の使用によりパーリ上座部では，自殺者が最終的に阿羅漢として般涅槃できることを示したといえる．本稿では，パーリアビダンマ文献と註釈文献を用いて，この語の意義と役割を考察する．パーリ文献の底本は PTS である．

2. Samasīsin の語義

Pāli-English Dictionary（PED）によると，Samasīsin は，a kind of puggala, lit. “equal-headed,” i.e. one who simultaneously attains an end of craving and of a life, とあり，漏（煩悩）の消滅と生の終わりが同時に起こる者である[2]．複合語で bahuvrīhi である．

この語はパーリアビダンマの *Puggalapaññatti*[3] では，簡略に説明される．

> Katamo ca puggalo samasīsī? Yassa puggalassa apubbaṃ acarimaṃ āsavaparyādānañ ca hoti jīvitapariyādānañ ca : ayaṃ vuccati puggalo samasīsī.（Pp 19 25–27.）
> 【訳】首を等しくする人（首等者）とは何か．ある人にとって，漏の滅と命の滅とが前後なく（同時に）生じるなら，彼は首等者と呼ばれる．

また，*Netti-pakaraṇa*[4] では，独覚，正等覚者とも同等に扱われる．

> Asekhabhāgiyaṃ suttaṃ navahi puggalehi niddisitabbaṃ: saddhāvimuttena, paññā-vimuttena, …, ubhatobhāgavimuttena, samasīsinā, paccekabuddha-sammāsambuddhehi cā ti.（Nett 190 7–11.）
> 【訳】無学分の経は9の人々によって教示されるべきである．信解脱者により，慧解脱者により，（中略），俱分解脱者により，首等者により，独覚と正等覚者たちによって．

3. 註釈文献における Samasīsin

パーリ註釈文献の *Puggalapaññattiatthakathā*[5] では Samasīsin が詳説される．

So pan' esa tividho hoti: iriyāpatha-samasīsī, roga-samasīsī, jīvita-samasīsī ti. Tattha yo cankamanto va vipassanaṃ paṭṭhapetvā arahattaṃ patvā cankamanto va parinibbāti, Padu-mathero viya. Ṭhitako va vipassanaṃ paṭṭhapetvā arahattaṃ patvā ṭhitako va parinibbāti. Koṭapabbatavihāravāsī Tissathero viya. Nisinno va vipassanaṃ paṭṭhapetvā arahattaṃ patvā nisinno va parinibbāti, nipanno va vipassanaṃ paṭṭhapetvā arahattaṃ patvā nipanno va parinibbāti, ayaṃ iriyāpatha-samasīsī nāma. Yo pana ekaṃ rogaṃ patvā antoroge yeva vipassanaṃ paṭṭhappetvā arahattaṃ patvā ten' eva rogena parinibbāti, ayaṃ rogasamasīsī nāma.（Pp-a 186 11–23.）

【訳】彼（首等者）はまた，三種である．威儀路首等者，病首等者，命首等者である．その中で，パドゥマ長老[6] の如く，正に経行しつつ，観を確立し，阿羅漢果を獲得して，他ならぬ［その］経行をしつつ般涅槃するもの．コータ山寺住者であるティッサ長老[7] の如く，住立しつつ観を確立し，阿羅漢果を獲得して，正に住立したまま般涅槃するもの．着座したまま観を確立し，阿羅漢性を獲得して，［その］着座のまま般涅槃するもの．横臥しつつ観を確立し阿羅漢果を獲得して，同じ横臥のまま般涅槃するもの．これが威儀路首等者という．また，ある病気を得て，同じ病中に観を確立し，阿羅漢果を獲得し，正にその病気によって般涅槃するもの，これが病の首等者という．

この後，sīsa（首，頭）に，13種類が挙げられる．（主なもののみ）

Kataro jīvitasamasīsī nāma? Sīsan ti terasa sīsāni : palibodhasīsañ ca taṇhā, …, kilesa-sīsañ ca avijjā, …, dassanasīsañ ca paññā, pavattasīsañ ca jīvitindriyaṃ, …, sankhāra-sīsañ ca nirodho ti.（Pp-a 186 23–30.）

【訳】いずれが命の首等者というものか．首とは13の首である．（1）障碍の首である渇愛，（中略）（5）煩悩の首である無明，（中略），（10）見の首である慧，（11）転起の首である命根，（中略），（13）行の首である止滅，とである．

Tattha kilesasīsaṃ avijjaṃ arahattamaggo pariyādiyati. Pavattasīsaṃ jīvitindriyaṃ cuticittaṃ pariyādiyati.…. Yassa c'etaṃ sīsadvayaṃ samaṃ pariyādānaṃ gacchati, so jīvitasamasīsī nāma.（Pp-a 186 31–187 5.）

【訳】この中で，煩悩の首である無明を阿羅漢道は終息させる．転起の首である命根を死心は終息させる．（中略）．そして，或るものにとってこの二つの首の終息が同時になるなら，彼は命の首等者である．

Kathaṃ idaṃ samaṃ hotīti. Vārasamatāya. Yasmiṃ hi vāre maggavuṭṭhānaṃ hoti, sotāpatti-magge pañca paccavekkhaṇāni, …, arahattamagge cattārīti ekūnavīsatime paccavekkhaṇa-ñāne patiṭṭhāya bhavangaṃ otaritvā parinibbāyati. Imāya vārasamatāya idaṃ ubhayasīsa-pariyādānaṃ samaṃ hoti nāma.（Pp-a 187 5–11.）

【訳】どのようにして，この（上記の）同時は生じるのか．機会の等しさによってである．何故なら，道からの出起がある機会には，預流の道に於いては5つの観察，（中略）阿羅漢

の道においては4という，19の観察を確立して有分に入って般涅槃するからである．以上の機会の等しさにより，上記の二つの首の同時の終息が生じる．

これらの註釈から，samasīsin の sīsa は筆頭のもの，主要なものであり，sama-については，機会が等しい事＝同時であること，が解かる．

一方，ニカーヤである *Saṃyuttanikāya* の『Godhika 経』[8] の註釈として，*Sārattha- ppakkāsinī*[9] では，Buddhaghosa は Godhika の死を samasīsin と説明する．

Satthaṃ āharitan hoti ti, thero kiraʻkiṃ mayhaṃ iminā jīvitenā?'ti uttāno nipajjitvā satthena gala-nāḷiṃ chindi. Dukkhā vedanā uppajjiṃsu. Thero vedanaṃ vikkhambhetvā, taṃ yeva vedanaṃ pariggahetvā, satiṃ uppaṭṭhapethapetvā, mūlakammaṭṭhānaṃ sammasanto arahattaṃ patvā, samasīsi hutvā, parinibbāyi.（Spk I 183 23–28.）

【訳】「刀を執ったらどうか」とは，長老は伝承によると「私のこの命は何になろうか」と明瞭に完成をして，刃物によって喉首を切った．苦の感受が生じた．長老は［苦の］感受を鎮圧して，正にその感受を把握して，正念を現前させて根本業処を思惟しつつ阿羅漢果を獲得し，首等者となって般涅槃した．

Tikhiṇena asinā sīse chijjante pi hi eko vā dve vā paccavekkhaṇa-vārā avassaṃ uppajjanti yeva. Cittānaṃ pana lahu-parivattitāya āsava-kkhayo ca jīvita-pariyādānañ ca ekakkhaṇe viya paññāyati.（Spk 184 17–20.）

【訳】鋭い刃物により頭部が切られた場合でも，一，二の観察の機会は必ず起るはずである．然るに，諸々の心には，素早い転起によって漏の滅尽と命の終息とが一瞬にであるように知られる．

また，『Channa 経』[10] の註釈でも samasīsin が説明される（Spk II 373）．Godhika も Channna も，譬え死の理由が自殺であれ，喉首を切ってから死の瞬間までのわずかの間の觀の確立により，阿羅漢果を獲得し般涅槃できたことになる．中村 1991[11] は「完全に修行したビクが，もはやこの世に生きていても無用であり，自分も苦痛に堪えないと思った時には，自殺することを承認していたのである．修行を完成した修行僧が自殺を行うのは，必ずしも非難しなかった.」と，『Vakkali 経』の項で述べているが，samasīsin という語の存在は，この言を裏付ける資料となる．

4. 終わりに

Samasīsin に関し，アビダンマ文献には，4ニカーヤからの事例は提示されていないが，ニカーヤへの註釈ではアビダンマでの解説を援用している．しかし，この語は Godhika と Channa 以外に註釈での使用例もない．この語は，自殺者が阿羅漢果を得て般涅槃できることの合理的な説明を可能にしたことを示唆する．

1）水野弘元 1977, 401. また，T 27 929b に「齊頂」とある．分別論者の説とあるがパーリの説か否か，不明である．ニカーヤでは小部経典 *Paṭisambhidāmagga* においても扱われるが，その解説は極めてアビダルマ的である．
2）PED 681. この説明自体が *Puggalapaññatti* からの引用の英訳である．
3）Pp 19.
4）Nett 190.
5）Pp-a 186.
6）森祖道 1984, 295 は，マハーパドゥマという，スリランカ律の専門家がいたという．
7）出入息観を行じて阿羅漢性を得，寿命を操作することができたという（Malalasekara 1983 vol. I 677, vol. II 497）．
8）S I 120–122. 七度目の精神集中からの退転を恐れ，刀を執り自殺する．
9）Spk I 182–185.
10）S IV 55–60. Spk II 373 9–13: So attano putthujana-bhāvaṃ ñatvā, saṃvigga-citto vipassanaṃ paṭṭhapetvā, sankhāre pariganhanto arahattaṃ patvā, samasīsi hutvā, parinibbuto. M III 263–266 への註釈 Ps V 83 も同様.
11）中村元 1991, 417.

〈略号〉（M. Cone の Dictionary of Pāli に従う．）

S　*Saṃyutta-nikāya.* Ed. L. Feer（vol. 1–5）and C. A. F. Rhys Davids（vol. 6, index）. 6vols. London: Pali Text Society, 1884–1904.
Spk　*Sārattha-ppakkāsinī.* Ed. F. L. Woodward. 6 vols. London: Pali Text Society, 1977.
M　*Majjhima-nikāya.* Ed. V. Trenckner. 6 vols. London: Pali Text Society, 1993.
Ps　*Papañcasūdanī.* 6 vols. Ed. I. B. Horner. London: Pali Text Society, 1977.
Nett　*Netti-pakaraṇa.* Ed. E. Hardy. 1 vol. London: Pali Text Society, 1961.
Pp　*Puggalapaññatti.* 1 vol. Ed. Richard Morris.
Pp-a　*Puggalapaññatti-atthakathā.* Ed. George Landsberg and Mrs. Rhys Davids. 1 vol. London: Pali Text Society, 1972.

〈参考文献〉

Malalasekara, G.P.（1937）1983. *Dictionary of Pāli Proper Names.* Vol. I, Vol. II. New Delhi: Munshiram Monoharlal Publishers.
片山一良 2002『パーリ仏典　中部（マッジマニカーヤ）後分五十経篇 II』大蔵出版.
高楠順次郎監修 1972『小部経典 18』南伝大蔵経 40，大蔵出版.
中村元 1991『仏弟子の生涯』中村元選集第十三巻，春秋社.
水野弘元 2009『南傳大蔵經總索引』第一部，ピタカ.
森祖道 1984『パーリ仏教註釈文献の研究』法蔵館.

〈キーワード〉 Samasīsin（首等者），阿羅漢果，自殺，*Puggalapaññatti*，*Netti-pakaraṇa*，*Puggalapaññatti-atthakathā*，*Sārattha-ppakkāsinī*.

（東京大学大学院）